間にあつて、戰鬪的労働組合は、自己組合の結成を堅くすると共に、最後の戰ひのために凡ての障害を排して戰線の統一に渾身の勇を鼓してゐる。

我口に於ける資本攻勢と労働階級の協同戰線

以上に述べたる世界の資本家階級と労働階級の情勢は、以つて我口の労資の情勢に適用することが出来る。なぜかならば、我が資本主義は世界資本主義経済の部分を形成するに過ぎないからである。戰後の世界恐慌が我口に襲来の兆を示したのは一九二〇年五月（大正九年）であつた。けれども生産手段産業（製鉄、製鋼、造船、機械等）は、戰時中の注文に依つて尚若干期間好況を続けたが、やがて労働攻勢は一轉して資本攻勢となり、時間の延長と賃銀切下げを中心とする労資必死の鬪争時代は展開された。神戸、大坂の造船大罷工、石川島罷工、芝浦池貝の金属罷工等其の他幾多の大罷工、総聯合運動等はかゝる形勢を物語るものである。この資本の攻勢は大正十二年の震災によつて益々猛烈化された。震災による五十億の闘きは資本家階級を一層死にもの狂ひにした。即ち彼等は一方には反帝口主義運動を闘ひ、他方には英米の資本家と闘ひ乍らも一層の支那搾取に努力し、大資本家は小資本家の倒壊を促進してこれを呑し、その獲得したる政治的権力によつて幾多の暴法を制定して労働階級に備へ、以つて労働階級に生活水準の劣悪化を強制し、かくて資本主義の安定の恢復を企図してゐる。見よ！政府の補助金と、官業工場の下附による製鋼トラストと造船トラストは実現されんとしてをり、小資本家、小工場は、その耐久力の欠除によつて頻々として倒壊し、資本の集中は加速度されてをり、失業者は既に二百五十万を突破し街頭に充満してをるではないか。更に見よ！共同印刷、別子の最近の大罷工は殆んど資本家階級に打ちのかされてゐるではないか。これ等が我が労働階級が直面しなければならぬ事象である。